花の百人一首
～桜～

解説ver

古への 奈良の都の 八重桜
けふ九重に にほひぬるかな

伊勢大輔

『通訳』

その昔、奈良の都に咲いていた八重桜が今日はこうして九重の都に献上され美しく咲いている。

『歌の解説』

「古へ」とは昔、これは「奈良の都」のことを指す。次に「八重桜」に「九重」を重ねている。

「九重」は、宮中を表す。昔、中国で王宮を九重の門で囲ったことからこう言われる。

最後に、「にほひぬるかな」とは色美しく咲くという意味である。にほひといっても、香りではなく見た目の美しさのことである。

『伊勢大輔』

新入りの女房が紫式部から桜を受け取る役目を譲られ藤原道長から和歌を詠むように要請された。その時、とっさに詠んだものがこの歌であるがとても機知にとんだものとして賞賛された。

もろともに 哀れと思へ 山桜
花よりほかに 知る人もなし

大僧正行尊

『通訳』

一緒にそろってしみじみ懐かしく思ってくれ山桜よ。花であるお前のほかに私の気持ちを理解するものはいないのだから。

『歌の解説』

「もろともに」とは、「どちらとも一緒に、そろって」という意味である。次に、「哀れ」とはいろんな意味を含む言葉であるが、ここでは「しみじみ、懐かしく思うこと」を意味する。私が「山桜」を思うように「山桜」も私を「哀れ」と「思へ」の意味がある。

最後に、「花よりほかに知る人もなし」つまり、「花のほかに自分の気持ちを理解するものはない」と花＝山桜を人に表している。

『大僧正行尊』

十二歳の頃園城寺に入り、出家した。この歌は十七歳の時寺を出て吉野の大峰山で修行をしていた時に歌われたという。深山幽谷の山奥では桜がきれいに咲いていたという。

高砂の 尾上の桜 咲にけり
外山の霞 たたずもあらなむ
前中納言匡房

『通訳』

高い山の上に桜が咲いたから人里近い山の霞はたたないでほしい。

『歌の解説』

「高砂の」は「尾上」の枕詞になっていて、高い山という意味である。

「外山」とは人里に近い山のことである。また、高い山を取り巻く峰などとも読み取れる。

最後に「霞たたずもあらなむ」は霞はたたないでほしいという意味である。

『前中納言匡房』

4才で書物を読み8才で『史記』や漢籍に通じ11才で漢詩を詠んだ。このことで神童と呼ばれた。東宮学士に３度も選ばれるなど学問に優れ、正二位言中納言になっている。後冷泉、後三条、白河、堀河の四天皇に仕え、政治の場でも活躍した。

久方の 光のどけき 春の日に
しづ心なく 花の散るらむ

紀友則

『通訳』

日の光が射すのどかな春の日になぜ桜は散っていくのだろうか。

『歌の解説』

この歌で詠まれている「久方の」は、日、天、空など天体に関する枕詞である。この詩では、日の「光」に対しての枕詞になっている。

次に、「しづ心なく」とは、落ち着いた心ではないということである。

最後に「花の散るらむ」のところには、桜が散っていくのはなぜだろう。という意味が込められている。これは、隠れ桜と言われ花と歌っているのは桜のことである。

『紀友則』

この和歌を詠んだ紀友則は、宇多天皇の宮廷で活躍した歌人と言われている。

4つの桜の歌の比較

☆美しく色づく八重桜が一条天皇の御世の繁栄を讃えているような歌である。桜が宮中を色づかせ華やかにしている様子を詠んでいる。

☆行尊でなくても一人修行をしている中山奥で見つけた桜には感動を覚えるだろう。行尊は桜を擬人化させ自分と重ね合わせているようにも詠める歌である。

☆匡房は代々儒者の者に聞こえた家に生まれ、学問に通じていた品のよい『正風』の歌を詠んだのはその為でもあると思われる。遠くから、桜を見てただただ、隠さないでほしい、桜を見たいのだと願いを込めた歌である。

☆春の光の中を桜は一刻一刻と待ってくれずに散っていく風景を切なく歌っている歌である。人と人の出会いと別れを桜の散る様子に例え無常観を詠んでいる。

4つの桜の歌の比較まとめ

　4つの歌の意味を比較してわかるように、同じ『桜』でも使われている意味は違うことがわかる。

　一つは詠んだ者の喜びと都の繁栄を歌い、また一つは桜そのものが見えなくならないでほしいと心の底から願った歌人の思いを詠んだものでもある。

　後の二つの中で、修行の中で見つけた桜への思いを詠んでいるものがある。この歌は桜を擬人化させたように歌っているようにも聞こえ、他とは、また違う桜の捉え方が出来る。最後に桜が散っていく様子を人と人との別れ、無常観を詠んでいる歌がある。この歌を比較してみるとわかるように、時代や詠んだ場所によって違いがあることがわかるだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【参考文献】

引用：著　白洲正子　『私の百人一首』新潮社版
著　あんの秀子　漫画　末次由紀『ちはやと覚える百人一首』

『百人一首で始める古文書講座(61，66，73，33)』百人一首で始める古文書講座【歌舞伎好きが変体仮名を解読する】(HONDA-N2.COM)